

2.2 奈半利港海岸、及び、室津港海岸等

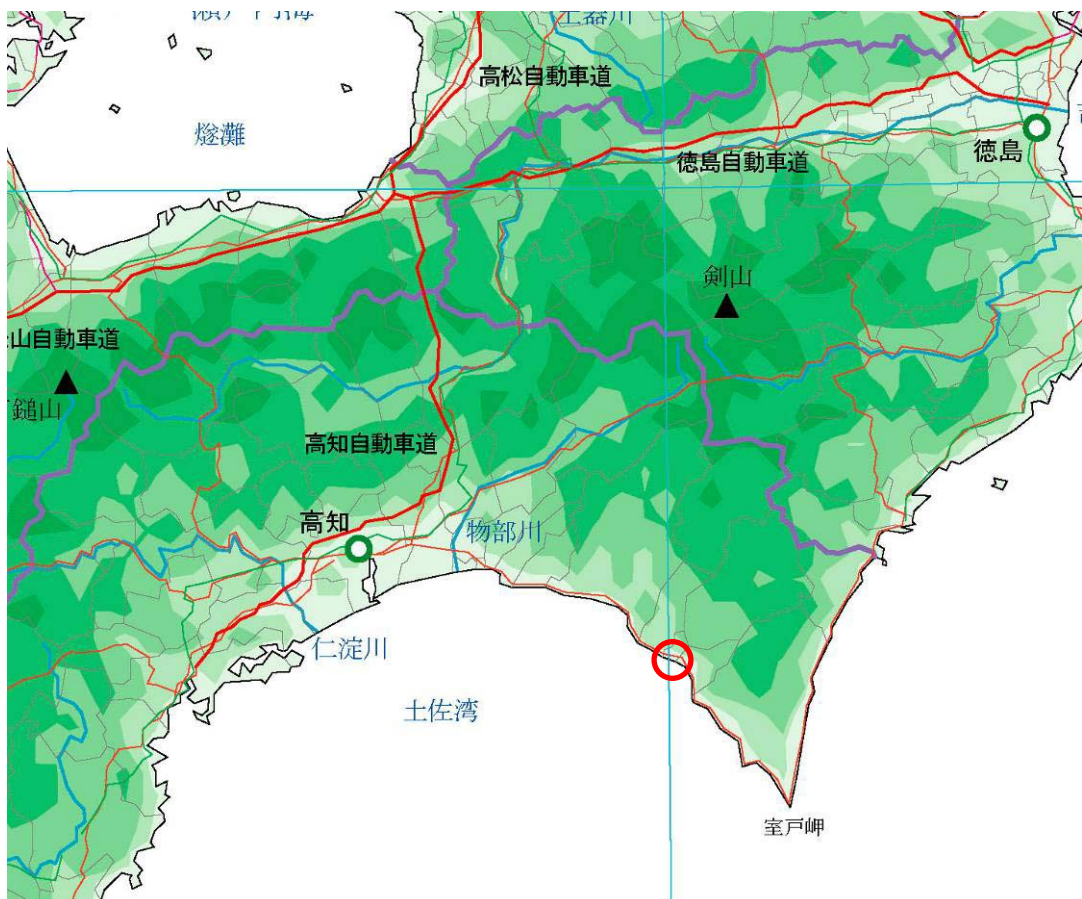
離岸堤に着生した珊瑚をきっかけに既存の地域の民間団体が結集し、珊瑚を活用した観光事業を展開し、さらに、海岸に興味を持ったメンバーが、防護への危険性を感じ、自主防災についての検討を始め、これらの成果を活用して、隣接する地域にも活動を展開している例

(1) 事例の概要

奈半利港海岸は、高知県の東部、高知市より東方約 60km、室戸岬の北西約 23km 地点にある奈半利港を基点に、東に 2km あまり続く海岸である。奈半利港海岸から奈半利港を挟んで西寄りには田野海岸が連なる。両海岸とも海岸堤防前面の砂浜の減少が進み、荒天時には堤内地民家への越波、または波しぶきが飛散し、海岸保全上憂慮される問題となっていた。

この防止対策として、1947～1958 年にかけて、海岸堤防の整備、1962～1976 年には消波工の設置が実施された。しかし、それ以降も海岸侵食が進み、越波、飛沫の被害が続いたため、消波効果と砂浜の回復を図る目的で 1975～1993 年にかけて離岸堤の整備が進められた。さらに、この離岸堤整備を機に背後地の創出による海浜空間の有効利用を積極的に進める目的で運輸省高知港工事事務所（現・国土交通省）、高知県および奈半利町では、1992（平成 4）年 2 月「奈半利港ふるさと海岸モデル事業」を策定し、調査委員会を設立、地域住民の要望事項を検討整理しながら、奈半利海岸地区に離岸堤、突堤、緩傾斜堤、養浜および飛沫防止植栽帯などの工事を進めた。

以上のような海岸整備を進める中で、1975（昭和 50）年頃より離岸堤に珊瑚が着生し、以後離岸堤の設置とともに珊瑚が着生するようになった。専門家の調査により 73 種と多くの種が確認され、特に内 22 種が土佐湾内で初めての確認種であり、更に数種類は、極めてまれな種であることが明らかとなった。



奈半利港海岸（高知県奈半利町）の位置

一方、背後の奈半利町では、平成 14 年 7 月土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線奈半利駅が開業され、交通・活性化の拠点となることが期待され、珊瑚の再発見、ふるさと海岸の整備と合わせて地域活性化への機運が高まってきた。

こうして、地元有志による活動団体「天然資源活用委員会」が結成され、グラスボートによる奈半利港海岸に着生したサンゴの鑑賞イベントを皮切りに、地域の資源を観光資源として活用する活動が開始された。さらに、観光振興に加え、海岸の防護にも注目し、自主防災に向けた検討を始めるとともに、奈半利の東約 18 km に位置する室津港、及び、室戸岬新港（室戸岬漁港）においても、同様に観光・防災に関する検討の活動を波及させている。

(2) 時系列による整理

年代	地域住民（天然資源活用委員会・高知 NPO 等）	高知県・奈半利町	主な出来事・決定事項
～ 1993	<ul style="list-style-type: none"> 1975 年ごろ、地元で離岸堤に珊瑚の着生を確認 	<ul style="list-style-type: none"> 1947～1958 年にかけて、海岸堤防の整備、1962～1976 年に根固め消波工の設置を実施 それ以降も海岸侵食が進み、越波、飛沫の被害が続いたため消波効果と砂浜の回復を図る目的で 1975～1993 年にかけて離岸堤の整備を進めてきた。 1992 年には、奈半利港ふるさと海岸モデル事業を策定 	<ul style="list-style-type: none"> 海岸堤防前面の砂浜の減少が進み、荒天時には堤内地民家への越波、または波しぶきが飛散し、海岸保全上憂慮される問題となっていた。
2002	<ul style="list-style-type: none"> 6 月 天然資源活用委員会の結成 8 月 ごめん・なはり線開通記念イベント「珊瑚ウォッチング」開催 10 月 「地域みんなで考えよう～天然資源活用と地域経済の再生～」シンポジウム開催 10 月 なはりコーラル号（珊瑚鑑賞のためのグラスボート）の継続的運航開始（イベントから事業化） 10 月 奈半利川文明再生構想発表 		<ul style="list-style-type: none"> 5 月 専門家の調査により、珊瑚の種類の豊富さと貴重性が提示される 7 月 くろしお鉄道（御免奈半利線）の開通。奈半利駅の誕生
2003	<ul style="list-style-type: none"> 8 月 「高知海辺の自然学校」の開催 高知県東部における海辺を活かした交流空間形成推進調査（全国都市再生モデル調査）の実施 奈半利地区自主防災組織立ち上げ検討 みなとオアシスの創造 	<ul style="list-style-type: none"> 11 月 珊瑚と海の中芸めぐりイベント 	
2004	<ul style="list-style-type: none"> 4 月 天然資源活用委員会の自立（事務所移転、高知県の職員要請、東部 NPO 設立準備）四国銀行（地域づくりファンド）補助金 7 月 夏休み・海と遊ぼう 珊瑚列車号（ごめん・なはり線を支援する会との連携事業） 8 月 海辺の自然学校（WAVE 港・海辺活動振興助成事業） 8 月 みなとまちづくり構想検討調査（四国地方整備局より高知 NPO 受託） 室戸市浮津地区自主防災組織立ち上げ検討 	<ul style="list-style-type: none"> 8 月 みなとオアシスへの登録 	
	<ul style="list-style-type: none"> 5 月 地元住民の生涯学習「なはり珊瑚」地元先行発表会（民と行政の協働事業） 11 月 みなとオアシス登録記念イベント（主催：奈半利町・（有）なはり観光文化協会） 		
2005	<ul style="list-style-type: none"> 7 月 海辺の自然学校 11 月 珊瑚モニタリング報告会 室戸中学校建替えワークショップ 		

(3) 詳細な解説

①前史

奈半利港海岸において、整備された海岸の離岸堤に着生した珊瑚の価値が評価されたこと、ごめん・なはり線が開通したことなどが契機になり、地域の活性化、観光客の滞在を狙い、町の魅力を再発見する機運が高まる。

中津港海岸では、1947～1958年にかけて、海岸堤防の整備、1962～1976年には根固め消波工の設置を実施していたが、海岸堤防前面の砂浜の減少が進み、荒天時には堤内地民家への越波、または波しぶきが飛散し、海岸保全上憂慮される問題となっていた。

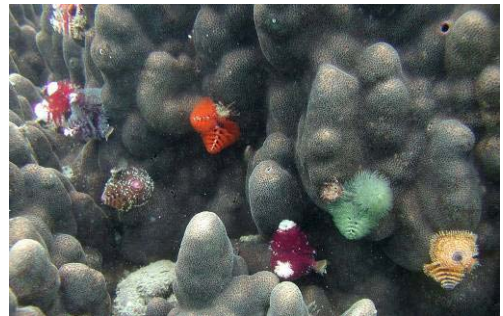
そのため、高知県は消波効果と砂浜の回復を図る目的で1975～1993年にかけて離岸堤を設置し、整備を進めてきた。1992年には、「ふるさと海岸モデル事業（地域住民に親しまれ、海辺と触れ合える美しい景観を有した安全でうおいのある海岸を創出する事業）」に選定された。こうして海岸整備を進める中で、昭和50年頃から離岸堤に珊瑚が着生していた。そのこと自体は地元においても何となく知られていたが、専門家の調査により、その種類の豊富さと、さらに貴重種が含まれていることが判明した。現在73種が確認され、内22種が土佐湾内で初めて確認されたものであった。^{*1}この専門家の調査結果により、地域内外から注目を浴びることとなった。

また、平成14年7月にくろしお鉄道（後免奈半利線）が開通し、奈半利駅は終発駅となる。観光への意識・期待が高まるなか、一方では奈半利町の近隣市町に、例えば北川村の「モネの庭」等の観光資源があり、鉄道は開通したものの観光客の通過点となってしまうのではないかという危機感もあり、町の魅力を再発見する機運が高まった。



奈半利港海岸

撮影：2003年



離岸堤に着生した珊瑚

出展：なはり観光文化協会ホームページ
(<http://www.neconote.jp/nahari/>)



ごめん・なはり線奈半利駅

出展：なはり観光文化協会ホームページ

○活動のきっかけ

奈半利町は全町、大人から子どもまで合わせて人口4,000でございます。それほど小さな町ですが、非常に大きな事業で、「ふるさと海岸」という立派な海岸が出来ました。しかし、野良犬と野良猫が散歩しよるだけの海岸やないか、これをどうすればいいかということで、考えながらやり始めました。

珊瑚の発見は、先に研究者が来たのではないんです。私たち地元では、小さいときから泳ぎをして、貝を拾って、魚を突きに行って浜辺で遊んでいたから、そこに珊瑚があったというわけです。太平洋沿岸だから珊瑚はどこにもあると、正直な話、思っていたわけです。それが離岸堤にだいたい余計に付いたと、県が見てみたら、これは大事だということになった。そういうニュースが新聞に載って、東北大学の珊瑚の研究をしている方が目にされて、自分のフィールドワークで行ってみたいということで、これはよう来たねということなんです。漁協に泊まりやと、めしはどうするで、風呂はどうするで、と言って、その代わりに、おまんも研究したことは全部奈半利へ置いてってや、全部うちに一番に知らせてよ、その約束やったらいつ来てもいいし、いつまで居てもいいよ、というようなことで、それから始まったんですわ。

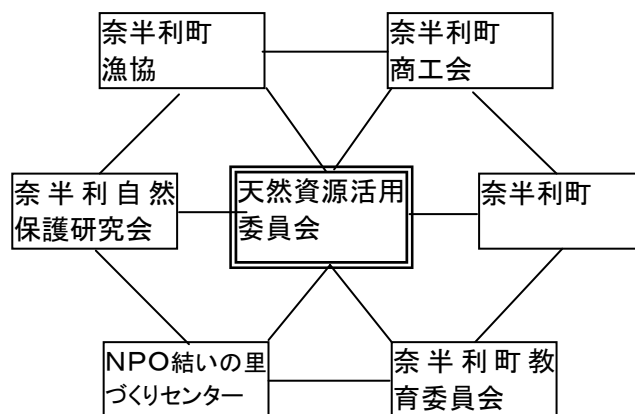
天然資源活用委員会 小笠原氏の発言（平成15年度里浜づくり意見交換会より）

②天然資源活用計画の開始

地元の既存組織の横断的な団結により「天然資源活用委員会」が組織化され、「人と自然が共生できる町 Nahari」を基本理念に、中期ビジョンとして、「奈半利川文明再生構想」、年度目標として、「天然資源活用計画」を提案し活動を開始した。

従来、奈半利町役場は、観光客の誘致等に関する意識が低く、観光課も観光協会も存在していなかった。しかし、奈半利町及び周辺には、まちづくり、保存活動等、様々な市民団体が小規模ながら組織されていた。このため、これらの組織が中心となって、珊瑚の貴重性等の再認識し、鉄道の開通を期に、交流を通じて、町の魅力を再発見、再評価し活用することを目的に、横断的に団結し、「天然資源活用委員会」を結成、活動を開始した。

(天然資源活用委員会の組織図)



天然資源活用委員会は、「人と自然が共生できる町 Nahari」活動理念として、「奈半利川文明再生構想」を掲げた。

「奈半利川文明再生構想」は、珊瑚礁の価値の再発見などを受けて、特に町が河川から発展した経緯に基づき、奈半利川流域住民が 20 世紀に見失ったことを思い出し、価値観を見直しながら共生・共栄を目指すことを目的としたもので、3～5年を目途としている。さらに、その中で年度目標として「天然資源活用計画」を作成し、「奈半利川文明再生構想」の中で謳われている価値観の見直しの第一弾として、上流域（魚梁瀬・馬路地区）との交流や、他市町村との交流を通じて、地域の持つ天然資源の再評価を行うこととした。

プロジェクト X 奈半利川文明再生構想

(青い珊瑚礁認知活動)



2002年10月29日

天然資源活用委員会

奈半利川文明再生構想
提供：天然資源活用委員会

○「里浜づくり」活動の今日までそして明日から

今日まで・・・

あれからもうどれ位の時間（とき）が流れたのだろうか。

四十年いや五十年近く昔の事になる、子どものとき友人や家族と共に、近くの浜や磯場でいつも貝や魚を追っていた。ある時は金付（銚）次は腰付け（貝を入れる網袋）と一日中海で日の暮れるまで遊んでいた。寒くも無く熱くもない心地よい水の冷たさ、氣を抜くと巻き込まれる波、魚を突いた時の手に感じる震え、喜び、水中の美しさ、他に例えようのない磯の匂い・・・・・・・・

あの時の情景は五感で今も覚えている。海辺を散歩しながらふっとそんな事を思い出し、そして考えた。今の子ども達は五感にどんな記憶を残しているのだろうか？無線ランにて共に敵と戦うゲームや、空想の世界に勇気を持って挑み勝利を感じる事を味わう事は出来るが、五感で感じる事やにおいまで脳裏に焼き付くあの感覚を・・・・それがいいか悪いかは言えない。ただ、身体に刻み込まれるような記憶を自然の中で作ってあげたいとは思う。私達の時代の子どもの達は自分で勝手に記憶を作った、造れた、しかし今は金付を使う場所も自由に貝を採る磯場も少なく、補習や塾通いで自由な時間も乏しい。という事は、親がある程度意識して機会を作るしかないかも。しかし、現在の親にも時間は少ない。（知らない）となれば、周り（地域）で作れないか？そして、そういった地域環境の少ない子ども達に提供出来ないか？タイムマシンに乗ってこの時間の隔たりを・・・・スタートです。

明日から・・・

「里浜づくり」の活動を行なう過程において嬉しい事、哀しくなる事等さまざまな問題が出てくる。

大きく旗を振り、先頭に起って行動する事は少しの勇気と時間を作れば誰にでも出来る事だと思っているが、継続する力と結果を残す事は一人では叶わないと考えている、私なりの仲間作りの妙薬を話そう。土佐の有名(?)な病気が三つある「聞いてない」(連携)「おら～知らん」(情報発信)「それが、なんなら」(否定) まずこの病気の治療から始めます。そしてこの病気が自分達の活動において不必要か話まず、そして言わ無いようにします。そうすると不思議とウィルスのようにドンドン広がっていくんです、簡単な事です。自分で良いと思った事は自由に動いてもらいます、責任なんて考えなくて良いんです好きな事を好きな時にすれば・・・・誰かに聞いて見てください「町が活性化するって何?」「子ども達が成長するって?」みんな答えは違うんですから、そうしていると出てくるんですネ、海岸を清掃する人たちや、花を植えるグループ、奈半利の海を自慢する人、子ども達と磯遊びをする人、雑草を刈る人、生き物を見守る人、今、地域の浜辺は大きく変わってきています。この輪が日本中に広がれば、各団体の抱えている様々な問題を共有(連携)し三つの病気の根幹である霞ヶ関から治療するんです。今、全国で「里浜づくり」の活動はドンドン広がっています、しかしながら、言いだしっぺは看板を変えて終結宣言を出すタイミングを計っているように見受けられます、しかし、いいんです自分達の地域の伝統や文化を受け継ぎオンリーワンの宝を磨き守っていくのは、誰の為でもなくここで生まれ・育ち・朽ちていく、私達自身の為なんです。

高知県安芸郡奈半利町 天然資源活用委員会 小笠原良

③珊瑚認知計画の実践

手始めに珊瑚鑑賞イベントを実施し、地域の資産である珊瑚の価値の認知度を高める取り組みを実施し、さらにシンポジウム等を開催することで、周辺地域のまちづくりの実践者、専門的な技術者等との交流、連携を図った。

まず、天然資源活用委員会は青い珊瑚礁活用計画として、2002年8月に珊瑚観光イベントを実施した。これは中古のグラスボート（海の中が船内から覗けるようになっている船舶）を天然資源活用委員会で購入し、地元漁協の協力を得て行ったものである。アンケートによりニーズを把握し、これは後に事業化された。要請があれば随時船を出している。基本的に民間の組織であり、独自にグラスボートの購入を、グラスボートの運航もボランティア的に実費程度の料金で実施している。また、こうした地元の動きに呼応して、奈半利町は2002年に奈半利町珊瑚検討委員会を設置。学識経験者や行政、天然資源活用委員会のメンバーにより今後の海岸事業の進



珊瑚鑑賞グラスボートの広告
出展：なはり観光文化協会ホームページ
(<http://www.neconote.jp/nahari/>)

め方や観光資源を活用した地域振興のあり方の検討を行った。

次いで、天然資源活用委員会は、考える人創出計画として、「地域みんなで考えよう」シンポジウムを2002年10月に開催。後免奈半利線の開通をきっかけに地域が連携してまちづくりを始めるきっかけ、人づくりを目的に、近隣町村その他市民団体と共に開催した。シンポジウムでは、専門家としてコンサルタント会社の技術士が講演し、「天然の風景をつくろうとしたら、莫大な資金がかかる。地域に存在する豊かな自然は財産である。」などと訴えた。また地域代表によるパネルディスカッションを行い、まちづくりに際して住民の参加意識が重要であることなどが話しあわれた。

④珊瑚認知計画からの展開

理念をしっかりと持つことで、珊瑚観賞イベント自体はプロローグであるという認識を参加者が持ち、次々に新たなアイデアを実施している。

「天然資源活用委員会」は、まちの活性化を目指した組織であり、基本理念を持っている。理念を実現するために、珊瑚を活用したイベントを実施し、さらに、それを事業化した。しかし、そのことが目的ではなく、本来の目的のため、もっと、奈半利町の知名度を高める方策や自然との共生の方法等、次々に新しいアイデアを出し、かつ実行に移している。

漁協の婦人会、近所の若者が組織を提案し、清掃活動など日常的な管理を行っている一方で、例えば競争になれている都会の子どもと、共生になれている田舎の子どもが交流することにはそれぞれにメリットがあるとして、高知NPOと天然資源活用委員会が協力して企画書を国土交通省（海岸環境整備計画室担当）に提出。海岸整備ニーズの調査を受託して2003年8月に「高知海辺の自然学校」を開催した。これは、室戸から移動してきた参加者やスタッフを天然資源活用委員会を中心とした町民によるスタッフが迎え入れた。（奈半利町には天然資源活用検討委員会以外にも、山・川・海をフィールドに活動を行う組織・個人は数多くあり、それらがタイアップして活動を展開している。）

また、奈半利町と連携して企画を検討し、内閣官房「全国都市再生モデル調査」（窓口：国土交通省港湾局開発課）に、選ばれた。これにより、「珊瑚の海と中芸めぐりイベント」として社会実験的にイベントを実施し、奈半利港を拠点に珊瑚を活用した観光客や地域住民が海辺に親しめる環境整備や事業の在り方を探りつつ、観光ルート、交流人口拡大、背後市街地活性化、周辺市町村の連携方策を検討した。さらに、四国銀行（地域づくりファンド）補助金を活用して、天然資源活用委員会の事務所移転、高知県の「地域支援企画員」の活用等による様々な補助金、助成制度、委託事業等をうまく活用しながら活動を展開している。

高知海辺の自然学校

主催 ◇国土交通省四国地方整備局
高知港湾・空港整備事務所
◇奈半利町



開催日

2003年8月19日
～8月21日

特定非営利活動法人

高知NPO
(天然資源活用委員会)

高知海辺の自然学校
提供：天然資源活用委員会

○「地域支援企画員」とは

地域支援企画員は、土木や農業といった部門ごとに配置された県の出先機関に属さない職員で、縦割りの組織に縛られず、職員の自由な発想で自主的に活動を行う、高知県独自の制度です。

地域支援企画員は、市町村と連携しながら、実際に地域に入って、住民の皆様と同じ目線で考え、住民の皆様とともに活動することを基本に、地域の自立につながるよう①主体的な住民の皆様の活動に対するアドバイス、②先進的な事例の情報提供、③人と人をつなぐ、④行政とのパイプ役、等を役割として、それぞれの地域の実情や要望に応じた活動を行っています。現在、総勢60名の地域支援企画員が地域で活動しています。

高知県庁 HP より

これらの活動資金の捻出は、天然資源活用委員会が直接に委託事業を受注しているものもあるが、天然資源活用委員会は法人格を有していないことから、当初よりサポートしてきた「高知NPO」がこれらの窓口となっているものもある。一般的には、NPO等、法人格がなければ委託事業や各種の助成事業を受けられない場合がある。この点で、市民団体の多くは、NPO等の法人格を取得することを目指す。天然資源活用委員会では、設立当初より、NPO化を目指していたが、5年を経過した現在も法人格を取得する方向に走っていない。

⑤観光振興から防護へ

海岸での活動を通じて、海岸への意識、認識等が高まるなか、海岸における防護への危惧への対応を始める。

2002年12月の中央防災会議により、東・南海地震の想定が出され、2003年4月の被害見直しにより、高知県の死者が最大6,200人と発表された。「天然資源活用委員会」は、まちの活性化を目指した組織として活動を行ってきており、奈半利港海岸をその拠点としてきたが、果たして、想定事態が発生した場合、活動はどうなるのか、さらに、町民は生き残ることができるのかという疑問が生じた。

多くの住民は、もしもの時、どのように行動すればよいのか、自分たちがどのような備えをしなければいけないのか等を本当にわかっているのか、行政になんらかの対応を期待しているのではないかと、いった問題点を認識し、そのための対応を検討する必要性が生じた。

幸い「天然資源活用委員会」の活動により、多くの地域住民が海岸に興味を持ち、さらに、「天然資源活用委員会」を当初よりサポートしてきた「高知NPO」の協力を得て、地元住民と一緒にあって、防災意識を啓発し、将来的には、「住まい空間におけるルールづくり」を通じた自主防災組織設立を支援する検討を行った。

具体的には、地域の現状を認識してもらうため、資料を整理するとともに、南海地震に関する被害予想等に関する講演を行い、図上訓練や市民相互の協議により、実際の行動計画に反映できる内容や問題点を検討した。この結果、各家の住民の顔写真入り地図を作成、実際に避難を実施し、人員を確認する等、訓練における不具合等を確認、改善する等の計画をもっている。

⑥奈半利から広域へ

奈半利海岸での活動を四国南東部に広げる。

奈半利の活動の始まりは、「天然資源活用委員会」であるが、この天然資源活用委員会のメンバーの中心は、実は、高知NPOのメンバーである。高知NPOは、1999年1月に設立されて以来、高知県各地で様々な社会貢献活動を実施してきた組織であり、そのコンセプトは、「地域への愛着心、情熱が地域づくりには必要であり、自分の出身地、または、愛着のある地域に入り込み、そこで住民と一緒に考え、一緒に動く」ということである。このため、奈半利の場合も、地元の人が高知NPOの支援を受けながら、活動を立ち上げ、活動が軌道に乗れば、地元の人たちに任せていくというスタイルであった。つまり、高知NPOの活動は、地元の市民活動、住民活動の初期を支援する組織でもある。このため、浦戸湾、嶺北地域等特定の地域において、その活動を実施してきており、当初より、室戸岬漁港に係っていた。1999年10月に「室戸岬漁港を考える会」を立ち上げ、ワークショップの開催など、ハード・ソフトの両面で継続的にまちづくり活動を行ってきたが、さらに、奈半利港海岸での経験を活かし、「みなとまちづくり」と「防災」をテーマに室津港において地域づくりを進めており、「室中未来プロジェクト」と称して、室津港の海岸堤防直背後に立地する室戸中学校の立替に際して、防護の視点を取り入れた提言等を行っている。

○【新しい公共のかたち】 四国南東部のまちづくりへの想い

1. ふるさとは、遠きにありて想うもの

「都会の人が3歩進む間に、田舎の人は1歩しか進まない」というのが、盆暮れの帰省時、私が感じる印象でした。満員電車で揺られて、2時間近く通勤し、いつも何かに追われているように、急ぎ足で歩く日々。田舎育ちの私にとって、都会暮らしは当初、刺激があって張り合いのあるものでした。しかし、8年を過ぎた頃から、「さてよ、これが自分の目指す生き方なのか」と疑問を感じるようになっていったのです。

田舎には仕事の手当が少ないなどの理由で、多くの人が都会に出てはいるが、生活環境としては、田舎の方が良いんじゃないのかな、と思えてきたのです。ならば、都会にはない環境を活かした、仕事の手当を見つけ出せば、良い環境で生活し続ける事が、出来るのではないかと、漠然と考えていましたが、具体的なプランは、なかなか発想できないまま、毎日が過ぎ去っていきました。

「僕らあが、中学校になる頃、鉄道が開通するがやっつて」。【ごめん・なはり線工事再開、開業目標2002年度】のニュースを東京で知った時に、脳裏に浮かんだ言葉です。小学校低学年の頃の、友達との会話でした。鉄道が開通しても、たぶん、自分には縁が無く、乗る事もないだろうなど、そのときは寂しく感じていた事でした。ところが、縁とは不思議なもので、数年後、転勤によって13年ぶりに、地元に戻る事となったのです。

2. 活動のきっかけ

高知に帰ってきて2年後の、2002年春、【奈半利町で、さんご礁の群生発見】の記事が新聞に掲載されたことが、一連のまちづくり活動へ、参画するきっかけとなります。

「さんご礁を活かしたまちづくりを考えて見ませんか」ある人の呼びかけにより、同年6月、サンゴウオッチングの企画を、作ってみることになったのです。天然資源（海・山・川）を活用したまちづくりによって、「アルバイト機会の創出がしてみたい」、「ごめん・なはり線の活性化にも貢献したい」予てから暖めていた想いは、「奈半利川文明再生構想」となっていました。

「中学校になる頃……」には間に合わず、私は40歳になってしまいましたが、鉄道の開通に合わせて、「やってみよう」と思っていた事を、具体的に実行する機会を得たのです。

3. 想いと、やりがい

企画という作業は、「白紙の紙に制限なく、自分の想いを描くこと」だと、常々思っています。人それぞれ、育った環境や想いが違うため、同じ企画になることは、まずありません。全てが「世界にひとつだけの物語」となる訳です。

そのため、常に発想を要求されるので、考えようによれば、「しんどい」とも言えますが、制約がない分、自由度が高く「やりがいがある」と感じています。

現在私は、引き続き【四国南東部のまちづくり】に関する企画（ものがたり）を考えていますが、背中には常に「やりがい」が乗っかっています。みなさんも、自分の愛する地域で、「やりがい」を背負って活動してみませんか。

高知NPO 公文勇一

※上記「奈半利港海岸、及び室津港海岸等」の事例は、以下の方々へのヒアリング等に基づいて作成した。

住 民：木下清（天然資源活用委員会代表）

小笠原良（天然資源活用委員会）

西尾壽公（天然資源活用委員会）

坂本快太（天然資源活用委員会）

公文勇一（高知NPO）

谷村幸夫（浮津NPO設立準備会代表）

(4) 事例より得られる手がかり

●高知NPOという組織の存在と活動

多くの市民活動のなかで、最も難しく、エネルギーが必要となるのは、その初動時、立ち上げの時期である。地域によっては、市民が問題意識を持っているにも係らず、その問題を広く市民で共有できないとか、なんとなく問題を感じているが、明確でない等の場合も少なくない。このような場合、どのような活動を行えばよいのか、誰に相談すればよいのか等、悩んでしまう地域も少なくない。奈半利港海岸の場合はこの最も難しい段階から、高知NPOの支援を受けていたことが大きい。高知NPO自体が、この部分を支援することを活動の大きな柱としている。高知NPOの存在とその活動が「天然資源活用委員会」の活動に大きく貢献している。

●地域の資源に着目した活動

海岸整備を進める中で、昭和 50 年頃から離岸堤に珊瑚が着生していた。珊瑚の存在自体は地元においても何となく知られていたが、専門家の調査により、その種類の豊富さと、さらに貴重性が判明した。この専門家の調査結果がなければ、地元は存在する魅力の価値に気づかず、海岸の位置付けも異なったものとなっていた。その後も、珊瑚だけでなく、地域に存在する様々な資源を活用した活動を展開している。貴重な珊瑚が着生した奈半利のケースは一見、特別なケースではあるものの、それぞれの地域には、それぞれ地元の人々が気づいていない魅力的な資源がある。その価値を見出し、価値を高める活動が求められる。このため、その地域の魅力を発見することから始めることが重要となる。

●目的と手段を見極める

いくつかの市民団体に見られる現象に、絶え間なくイベント等を行って、地域の活性化を図ろうとし、イベントを開催すること自体が目的となってしまう、本来の目標を見失っている場合がある。「天然資源活用委員会」は、まちの活性化を目指した組織であるが、特徴的な点として、「奈半利川文明再生構想」という基本理念を早期に造っていることが挙げられる。理念を実現するために、珊瑚を活用したイベントを実施し、さらに、それを収益事業として事業化した。しかし、収益事業を行うことが本来の目的ではなく、収益事業は手段であることを認識し、奈半利町の知名度を高める方策や自然との共生の方法等、本来の目的のため、次々に新しいアイデアをだし、前進し続けている。

●名を取らず、実を取る

「天然資源活用委員会」は、現在でも、任意団体である。たまたま、支援団体として高知NPOが存在したとはいえ、このことは、「天然資源活用委員会」の性格を良く表している。とにかく、組織は造ることに一生懸命になると、それが目的化してしまい、造ったあとに目的を失ったり、組織を維持するためにやりたいこともできない、何をすればよいかわからなくなる等の場合も少なくない。この点、天然資源活用委員会は、グラスボートの運航が目算どおり事業的に成立しなかったことも大きな要因かもしれないが、組織を強化する方向に走らず、各種のイベントや活動を次々と実施していくことに専念した面がある。

参考文献)

※1 玉井佐一・天野玉雄「話の広場高知県奈半利港海岸の離岸堤に珊瑚の群生」土木学会誌 8月号、2003